

西川治先生を送る

山口 岳志

西川先生は、昭和33年に理学部地理学教室の助手から、助教授として教養学部に着任されて以来、今日に至るまで28年の長きにわたり、研究と教育を通じて人文地理学教室の充実と後進の育成にあたられた。

西川先生のお顔を初めて拝見したのは、昭和33年の早春のことだったと思う。昭和30年から2年間にわたり、フンボルト留学生として西ドイツのボン大学に学ばれた先生は、われわれ焼跡・闇市派の学生にとって、ヨーロッパの学問の香りを身につけられた眩しい存在であった。本郷の寿司屋で催された教室の帰国歓迎会の席上では、いろいろなドイツ地理学界の近況を披露されたと思うが、記憶に残っているのは、「ドイツの青春」に関するエピソードだけだったとは、まことに不肖の極みである。

西川先生の業績は多岐にわたるが、あらゆる分野に関心を示され、昭和46年に教授に昇任されてからも、後進の話をよく聞かれ、つねに人文地理学の新しい潮流に目を向けられていた。地質学から分離した本郷の地理学教室にあって、先任の木内先生とともに人文地理学の脱皮を図られた御苦労は、当時の状況を顧みるとき、並大抵のことではなかったと思う。

新たな人文地理学を海外に求めた私が帰国して以来、西川先生とのお付き合いは23年に及ぶが、その後の地域論をめぐる先生との対話は、極めて新鮮で刺激的であった。当時ばらばらの生半可な知識しか持っていなかった私にとって、先生が教養学部の「比較文化研究」に書かれた「地域科学序説」は、その後の博士論文作成や研究活動の方向づけに有用であった。この機会にあらためて御礼申し上げる。浅学非才を省みず先生の論文の内容に疑問を呈し、御説朋を求めた昔を思い出すたびに汗顔のいたりと相成るが、若い世代に追われる身となった今でも、あの頃のことは忘れるどころかますます鮮明になって来る今日此頃である。

西川先生はお酒をあまり召し上がらない。したがって、先生と酔いにまかせて議論した経験はない。昭和48年の秋に集中講義のため、当時私の勤めていた北大へ来られた際、正門前の寿司屋で先生を囲むささやかな慰労会が開かれた。任務を終えられた後の心地よいお酒が進むにつれて、北大理学部の地理学に関する論客であった藤木先生と相対して、古今東西の地理学について、背を伸ばし上気して次から次へと問答を繰り返される西川先生のお姿は、まるで西ドイツから帰国された直後の頃のように、全身に活力がみなぎっておられた。

ウィスコンシン大学で地理学本質論を講ぜられ、大著を世に問われたハーツホーン教授は、講義よりもゼミナールでその魅力を発揮されたそうである。西川先生も、講義よりも対話でその真価を発揮されたと思う。その意味から、若い地理学徒がもっともっと先生との対話を求めるよう努力して欲しい。対話には大学も教室もいらぬ。退官された後も、学術会議や日本地理学会などお忙しい仕事が山積されていると思うが、御健康に留意され、あらゆる場所で地理学の対話にのぞんでいただけるようお願いして、送別の辞にかえたい。

(教養学部報第310号、昭和61年1月20日付より転載)